19.6 20

朝日新聞

石見

←江戸時代の漂流民→

200年で100件

朝鮮半島

鎖国時代の交流明らかに

江戸時代の朝鮮半島から石見地方への漂流民の研究が、浜田市内の郷土史家、森須和男さん(59)と県立大学院生、呉相美さんの共同で進められている。森須さんの集計では、異国船の漂流は、200年余りで約100件で、日本海側の地域の中でも多いとみられる。韓国に残る記録の調査も始まっており、鎖国時代の交流の歴史も明らかになりそうだ。

(西江拓矢)

浜田・森須さん 留学生・呉さん研究

ビバ!石見

共同研究の中間報告をする森須和男さん(中央)と呉相美さん(左)＝3月10日、浜田市野原町の県立大で

森須さんは、歯科用医療器材販売会社を営む傍ら、江戸末期に密貿易で死罪となった浜田藩の商人、八右衛門の研究など主に海に関する郷土史に取り組んできた。

16年ほど前から、江戸時代の石見の海沿いの集落の有力者によって書かれた古文書などを丹念に読み解き、異国船の漂着の記録を一つ一つ調べた。

確認できたのは、1642年から1868年の間に、朝鮮半島からの漂流が80件。さらに、国籍が未確定だが、朝鮮半島周辺からとみられる異国船が36件あった。散逸した古文書が多く、実際は、もっと多かった可能性がある、という。

また、江津から朝鮮半島に漂着したとの事例が1件確認できたが、土地の古老らに聞いても言い伝えなどが残っていなかった。

森須さんは、県立大学北東アジア地域研究センターの市民研究員として、韓国からの留学生、呉さんとの共同研究を昨年度スタート。2人は、韓国側に残る漂流民に関する当時の記録などを持ち帰り、現在、呉さんが、石見に関する記述をリストアップ中だ。

当時の資料には、石見の人々が、漂流民に食料を与え、船を直すなど手厚く遇したことが書かれており、日本と朝鮮との間に信頼関係があったことがうかがえるという。資料を読み込み、さらに、具体的な対応を調べていく。

森須さんは「これだけ漂流があったことが、石見では知られていないのが残念。江津からの漂流者について、さらに資料を調べたい」と話した。

共同研究を指導している同大の井上厚史教授は「石見地方の漂流民の研究は、ほとんど手つかずだった。交流の歴史を掘り起こしていくことは両国にとって非常に重要だ」と期待している。